

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 研究会合報告-2002年度

雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	37
ページ	244-246
発行年	2002
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00011312/">http://id.nii.ac.jp/1060/00011312/</a>

## 研究会合報告―二〇〇二年度

### 研究例会

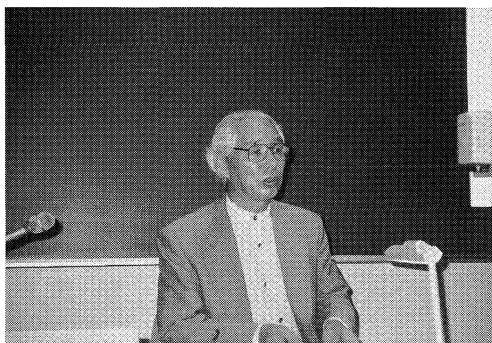
中国西部大開発と退耕還林・草政策について

(二〇〇二年六月二十九日)

アジア・アフリカ文化研究所研究員 飯塚勝重

別掲「中国における緑化政策―退耕還林・還草工程を中心に―」

(二一(三四)頁～三九(一六)頁) 参照。



飯塚勝重 研究員

平成一四年度「私立大学学術研究高度化推進事業」に係る「学術フロンティア推進拠点」採択記念講演会

日時 二〇〇二年一〇月二日(土) 午後一時～五時半  
会場 東洋大学白山スカイホール

別掲「東アジア・東南アジア諸国にみる経済発展と都市化による伝統文化の変容」(一五八頁～一九二頁) 参照。



会場風景①



会場風景②

## 公開研究例会

### 最近における世界の華人社会とチャイナタウン

(十二月一四日)

アジア文化研究所研究員 山下清海

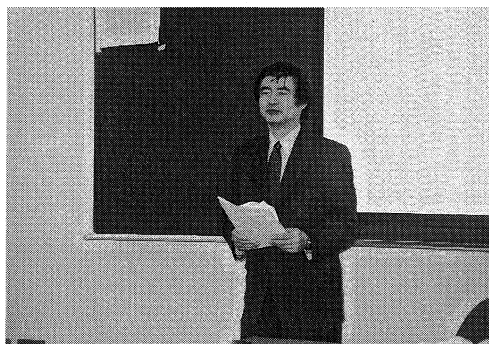
発表者は、修士論文のテーマに横浜中華街を選んで以来、一貫して人文地理学の立場から、日本および海外各地の華人社会やチャイナタウンに関する研究に取り組んできた。

華人社会・チャイナタウンを研究する場合、人文地理学的視点の特色として、次のことが指摘できる。

第一に、人文地理学では、華人社会の地域性（地域差、地域的特色）と普遍性（共通性）を明らかにし、それらの要因について考察することを重要な課題と考える。

第二は、人文地理学は、華人社会の居住の側面や景観的側面を重視する。そのために、チャイナタウンは、人文地理学にとってきわめて重要な研究対象となる。なぜなら、チャイナタウンは、居住国の華人の境遇を如実に反映しているからである。発表者は、「チャイナタウンは華人社会の顔」であると考えている。

発表者は、日本と世界のチャイナタウンの形成と変容、華人社会の地域性についての研究を主として実施してきた。横浜中華街の研究を手始めに、日本三大中華街（横浜中華街、神戸南京町、長崎新地中華街）の調査研究を継続して行っている。



山下清海 研究員

大学院博士課程在学中に、文部省アジア諸国等派遣留学生としてシンガポールの南洋大学に留学する機会を得たが、これを契機に東南アジア華人社会の研究に取り組み、それらの成果を『東南アジアのチャイナタウン』（古今書院、一九八七）や『シンガポールの華人社会』（大明堂、一九八八）として公刊した。

その後、文部省在外研究員としてカリフォルニア大学バークレー校で研究の機会を得て、北アメリカ華人社会の研究を始め、しだいに世界的スケールでの華人社会・チャイナタウンの比較研究に取り組むようになった。それらの成果の一部は、『チャイナタウン——世界に広がる華人ネットワーク』（丸善、二〇〇〇）としてまとめた。

世界各地の華人社会に関する研究を進めていく一方で、華人のふるさとである中国の「僑郷」（きょうきょう、華僑の故郷という意味）の調査も実施し、『東南アジア華人社会と中国僑郷——華人・チャイナタウンの人文地理学的考察』（古今書院、二〇〇二）を出版した。

近年、世界各地で華人社会の発展が著しく、新しいチャイナタウンの形成もみられる。今回の発表では、このような華人社会の最近の動向について、各地にみられるチャイナタウンに焦点を当てて報告した。これまで発表者が実施してきたフィールドワークの成果にもとづき、東南アジア、北

アメリカ、オセアニア、ヨーロッパなど世界各地のチャイナタウンを、スライドを用いながらグローバルスケールで比較検討した。

〔付記〕 本報告に関連する情報は、次の発表者のホームページを参照していた  
たきたい。

<http://hal2001.iakura.toyo.ac.jp/qinghai>

→ Yahoo Japan で「山下清海」を検索